

カリブ海地域における小規模農業とジェンダー

——「内部市場売買システム」再考——

Small Farming and Gender in the Caribbean: Reconsidering “Internal Marketing Systems”

お茶の水女子大学大学院教員 石塚道子

This paper tries to clarify the impact of structural and gender analysis to explain the nature of small farming in the contemporary Caribbean. First, I query the validity of the past and the latest classifications on world agricultural regions, which cannot address the nature of small farming in the Caribbean. Second, I examine the notion of “Internal Marketing Systems,” proposed by Sideny Mintz in the late 1950s, from the perspective of gender. The purpose of reconsidering the notion of “Internal Marketing Systems” is to know how Mintz had found a way to articulate two different modes of production in the Caribbean before the development of dependency theory on economy in the Third World and to examine what escaped Mintz's notice due to the lack of gender analysis. Third, I reexamine information about women's work in agriculture and local markets presented in Mintz, Horowitz, De l'orme and Ishizuka's respective papers between 1960 to 2003, in order to complement Mintz's notion. What needs to be emphasized is that women play a major economic role in agriculture in the Caribbean as farm workers, farmers, farm laborers, heads of farm households and marketers of agricultural produce. Women are primarily self-employed subsistence farmers and producers/traders. They almost completely dominate the distribution and retailing of local grown food crops. Finally, based on the theory of continuing original accumulation proposed by Claudia von Werlhof, I conclude that the work of women as producers/traders in local markets allows articulation of the production of small farming with global economy in the Caribbean.

Key words : Small farming Gender Articulation of modes of production
キーワード : 小規模農業 ジェンダー 異なる生産様式の接合

1. 問題の所在

WCED (環境と開発世界機関) は経済のグローバル化のもとにある世界諸地域の農業を、産業的農業型 (industrial agriculture)、資源一貧窮農業型 (resource-poor agriculture)、緑の革命農業型 (Green Revolution agriculture) と類型分類している (WCED1987)。この類型分類によれば、カリブ海地域は産業的農業である砂糖キビやバナナを中心とするプランテーションと資源一貧窮型農業である小規模自営農民の農業が共生しているということになる。しかし、カリブ海地域の小規模自営農民による農業は零細ではあるが農村には飢餓や栄養不良による貧窮化は見られない。

カリブ海地域の小自営農民の農業は、近代奴隷制期のプランテーション内自給用食料作物生産に起源しており、先住民であるアラワク、その後渡来したカリブとヨーロッパ、アフリカ、アジアの農耕文化を複合的に継承して新たに創造されたクレオール農耕文化である。19世紀中期の奴隷制廃止後、プランテーションを出た解放奴隷たちは、プランテーションの残余である内陸の傾斜地で自律的な農耕を行うようになった。しかし、プランテーション経済の圧倒的な支配のもとで多くの小規模自営農民はプランテーションで季節的労働をするか、都市さらには欧米地域への出稼ぎをしてしか家計を成り立たせることはできない状況におかれてきた。つまりカリブ海地域の農民とは、自己完結的な農耕共同体としての歴史的経験をもたず、つねにプランテーション経済に従属し、それと相互補完的に存在してきた「再構成された農民層」(Mintz1974:146-156)なのである。農民たちの生産目的は、自家消費食料生産というよりはむしろ地域内部の市場に向けた商品生産に置かれてきた (Potter,

et al.2004:99)。さらに、農業における生産、とりわけ流通を担う主要な労働力は奴隷制期から女性であった (Momsen1987: 344-347, 1993a, b, Elis2003:25-31、石塚1997)。したがって、カリブ海地域の小規模自営農民の農業を把握するためには、生存維持経済の解体や貧窮ではなくジェンダー視点から産業型農業との連関においてそれを捉えることが重要なのである (石塚1991, 1993, 1997, 2002)。

従来の農業経済研究では、このような歴史的過程から生じたカリブ海地域の小規模自営農民の農業の文化的特性は、まったく顧みられることがなかった。農業経済研究の視点は他地域との比較に置かれており、結果としてカリブ海地域の小規模農民たちの生産拡大意欲、技術革新志向の希薄さ、コミュニティの結語力の弱さ、村落統合社会組織の欠落、境界認識の弱体性などを指摘し、そこにカリブ海地域農業の周辺性や特殊性があるとされた (Carnegie1987: iv-v)。今日では、カリブ海地域のみならず発展途上地域の小規模農業を後進性というような否定的なステレオタイプで一元的に捉えることに対しての批判がなされるようになってきているが (Potter, et al.2004:125)、それでもなお冒頭で述べたようにWCED農業類型分類ではカリブ海地域の小規模自営農民の農業が不可視となるというような事態が起こりうる。これはWCEDの農業分類が大まかすぎて個別の地域特性を十分に考慮していないという問題なのではなく、類型化することで類型間の構造的連関を隠蔽しまうという認識枠組みの問題、そしてジェンダー視点の欠落の問題である。

そこで本論文では、いち早く1950年代にはカリブ海地域の小自営農民経済が生存維持経済ではなく、プランテーション制と敵対しつつ、同時に融合し、世界経済と接合する動態経済であることを論証していたアメリカ合衆国の文化人類学者S. ミンツ (Sideny,

Mintz)の「内部市場売買システム (internal marketing system)」概念の先駆性とそこにジェンダー視点が欠落していたことの問題性を検証することによって、発展途上地域の小規模農業認識の新たなあり方を考察する。

2. S. ミンツの「内部市場売買システム」概念の先駆性とジェンダー視点の欠如

1947年からカリブ海地域をフィールドとして文化人類学研究を行ってきたアメリカ合衆国の文化人類学者M. ミンツは、個別的なローカル・コミュニティの農民市場での売買行為を、小自営農民の経済、政治、社会複合体の文化的表象であるとみなし、その空間的、時間的、制度、行動様式上の特性を多角的に分析することによって、カリブ海地域の小自営農民経済はプランテーション制と敵対しつつ、同時に融合し、世界経済と接合する動態であることを析出する分析概念「内部市場売買システム (internal marketing system)」を創出した (Mintz 1955, 1959, 1960a)。ミンツによる「内部市場売買」概念とは、各地域の農民市場を、商業の場でありながら、そこでは同時に農民、商人、国家権力のさまざまな利害の調整と交渉がおこなわれる社会空間と見なし、その動態を記述分析することである (Mintz 1960:60)。ミンツは、1950年代から1960年代現在のカリブ海地域の市場は、貨幣経済段階の第一期 (貨幣が純粋に伝統的で、市場が外部世界からの孤立を証明する存在である段階) から第二期 (交換がナショナルな枠組みを越え、諸地域を統合し、商人の専門機能が確立している段階) への過渡期にあると指摘した。過渡期とは、市場が外部世界との接合を果たす第二期に向けて伝統的諸関係が破壊され、経済権力の新路線にそった社会が現出し、対立と共同の新たな社会関係が取り結ばれる時期である。農民市場という場にはこの過程がより顕著に露呈される。農民は、ここで余剰生産物を売り、彼自身では生産が不可能な生活物資を買うのだが、この価格は、直接にしろ間接にしろ、商人が流通意図を持って農民から農産物を買付けるという売買行為のうちに決定される。国家権力は、市場を通じて農民層を教育し、刺激して輸出向け作物生産を操作することができる。したがって内部市場での売買行為は、農民、商人、国家権力がそれぞれの利害を調整するために交渉する行為であり、それは小自営農民経済と世界経済の接合の実体なのである。このような「内部市場売買」概念は、小自営農民経済をプランテーション経済から分離した閉鎖的なローカル・コミュニティの経済としてその個別的な分析に終始していたそれまでのカリブ海地域研究の転換点となった。

「内部市場売買システム」概念の先駆性は、第一に、それが農業経済学や農業地理学ではなく文化人類学研究から創出されたということ、第二に、それがまだ近代世界システム論がその明確なかたちを現してはなかった1955年から1960年と言う時期 (ウォーラスティン 2004 = 2006:51-52) に、いち早く異なる生産様式間の接合 (articulation) を指摘したという二つの点から検討されねばならない。第一の文化人類学研究については、まず文化人類学という学問領域が人間の本质を普遍とみなす近代ヨーロッパ中心主義的な知の体系からは自由となる可能性をもっていたことに留意することが必要であろう¹。もっともフランスにおいてC. レヴィ=ストロースの『親族の基本構造』(1949 = 1977/78) を経て『野生の思考』(1962 = 1976) が世に出て構造主義人類学が確立し、彼やL. アルチュセールの影響下にあったC. メイヤスーやM. ゴドリエらのマルクス主義文化人類学の成立も1960年代から1970年代のことであった²。

ミンツはJ. スチュワードの率いた文化生態学派に属していたからフィールドでのアプローチはフランスの文化人類学者たちとは異なっていた。しかし、ミンツは奴隷制期にさかのぼる農耕文化の歴史的考察とフィールドでの綿密な観察による文化人類学思考において、近代経済学の経済合理人モデルでは説明できない生産と流通における農民の行動を規定する構造を捉えることができたのである。第二に、ミンツが異なる生産様式間の接合を検証しえたのは、農民の生産目的が生産維持のための食糧生産よりはむしろ地域の内部市場に向けた商品生産にあるとして、ミンツが市場研究を重視したことによる。ミンツは、生産者である農民は市場では販売者、また消費者ともなるという市場を媒介とした多様な労働行為の「混沌とした見せかけ」の内に、個別のローカル・コミュニティの経済、社会構造を総体として露呈するような「秘めた深い秩序」があることを発見し、それが農民経済を世界経済へと接合する構造であることを明らかにしたのである (Mintz 1960, 1959)。

このような「内部市場売買」概念は、グローバリゼーションのもとで個別地域における「ローカル」と「グローバル」のせめぎあいが増大化されている今日にもなお有効な点を含んでいると思われる。しかし、ミンツは小規模自営農民の農業労働と市場における商業労働の大半が女性に担われていることについて言及はしているが、それが「男性、資本をいかに富ませるかという問題であること」(Neptune-Anglade 1986:13-18) には言及していない。「内部市場売買システム」概念によって分析される対象は市場における女性の労働であるのにもかかわらず、女性と男性間の権力の問題への目配りはなされなかった。「ジェンダー」の視点からの分析の欠落は、歴史的制約とはいえきわめて残念なことである。当時「内部市場売買システム」概念に「ジェンダー」視点からの分析があれば、接合の実態ははより明確に検証されていたであろう。

そこで、第3節では1950年代からミンツがハイチで、それに続いて1970年代にM. ホロヴィッツ、J-C, ド・ロームらが小アンティール諸島のマルティニクでおこなった内部市場研究 (Horowitz 1967, De L'orme 1972)、さらに1980年代から今日まで筆者が小アンティール諸島で継続してきたカリブ海地域女性の労働研究 (石塚 1982, 1985, 1991, 1993, 1997, 2002, 2003) からの知見を加えて内部市場の形態と機能を、第4節では市場における女性の労働を再吟味し、「内部市場売買システム」概念の補完を試みることにする。

3. カリブ海地域の内部市場

カリブ海地域の小自営農民は、主として食料作物栽培を行い、それを地域市場に出す。しかし、砂糖キビ、バナナ、パイナップル、コーヒー、カカオなどの投機的作物の請負栽培、分益小作式栽培も行う。ゆえに土地利用は極度に集約的である。地下には根栽類、地生-蔓生類、地表-穀類および蔦生類を同時栽培する農法は、技術的には未熟であるとしても、食糧の連続性を保持するという利点を有している。さらに生活上不可欠な薬草や手工芸資材用植物を含めて、これらすべての収穫物は市場に出され、現金収入源となる。小自営農民は植付作物と労働時間配分の決定に必要な情報を地域市場の動きから得て、零細な耕地の合理的利用を図るのである。カリブ海地域の市場システムはこのような農業基盤のうえに成り立っている。

常設市場空間網は、最小行政単位の地区市場-地域中心市場-首都市場という三段階で構成される。ただし、小規模島嶼で道路網がよく整備されているマルティニクでは、地区市場は例外的であり、また近年はとくに地区から直接に首都市場への出荷も増大して

いる。定期巡回市場の場合、市日は巡回商人がひとつの市場から次の市場へと移動できるように循環的に設定されている。常設市場でも巡回市場でも、もっとも重要な曜日は土曜日と日曜日である(Horowitz 1967:33, De L'orme 1972:322, 石塚1982:8)。これらの曜日には、野菜の商品量が増大され、肉、豆、石油、油、米、燻製にしん、塩漬鰯や干鰯、日用雑貨の種類も増える。マルティニクの地域市場では、独立した小売店舗を持つ商人も市場内に「トレイ(tray)」と呼ばれる机式販売台を設けて商売する。「トレイ」は地域に常設市場が建設される以前の1930年代までの形式(De L'orme 1972:324)。であるが、今日でも常設市場の街路には「トレイ」による街路市の光景が見られる³。

市場の立地条件は、地域中心、首都ともに中央の大通りに面し、小型トラックが容易に出入りできる場所である。常設市場の監督、管理するのは地域自治体行政当局である。ハイチでは地域の有力者が、清掃、営繕、保安と警備を独占することがふつうであった、民衆はこの私的権力を公権力である「国家権力(état)」と同一視していた(Mintz 1960:68)。マルティニクでは、管理事務、清掃、営繕は、地域自治体、保安と警備は警察と消防署が担当している。

常設市場の空間は、商品が集合し、処理され、販売されるという経路が網の目のように組み合わされて形成される。例えば、朝、搬入され商品登録された豚は、再販人に買い付けられて屠殺場に回されて解体され、小売販売台に並ぶ。食肉売場は、この経路にそって空間配置がなされている。穀類も同様に、搬入登録-買付け-脱穀-製粉-小分けあるいは加工-小売販売台の経路である。そしてこの流れのなかで価格が上昇していく。売場は、イモ、バナナ、パンの実など「グロ・レギューム(gros légumes)」と呼ばれる主食根菜類、レタス、パセリ、ニンジン、唐ガラシ、トマト、キュウリ、インゲン、タマネギなどの「レギューム・フィン(légumes fins)」と呼ばれる野菜類、オレンジ、ライム、レモン、マンゴー、アボカド、ココナツなどの果物、香草、穀類、乾燥香辛料、食肉およびその加工品、燻製、塩漬、生鮮海産物、菓子、小家畜(ウサギ、ニワトリ)、衣料品、日用雑貨、小間物、薬草、薬品、化粧品、書籍(伝道書、占い)など品目ごとに区画化されている。売手の位置は固定しており、変動はまれである。この区画化は、売手にとって迅速な市場状況の把握、買い状況、価格決定の迅速な判断に、買手にとっては目的の商品を見つけやすく比較も容易であるという利点がある。同一区画内の売手間には、見張、値引き談合、顧客を奪わないという共同関係が成立している(Horowitz 1967:35, 石塚1982:9)。

市場が形成する複合システムは、季節、耕地の拡大と縮小、交通の発達などの要因でたえず変化する(Mintz 1960:63-64)⁴。とくにバナナや砂糖キビ、コーヒーなど輸出向け商品搬出期には、住民の現金収入が増え、市場での肉や日常雑貨、衣料品の買い入れが増大する現象に現れ、市場での取り扱い商品量は1~6月には増大し、7~12月には減少する。ド・ロームは1929年~1965年間におけるマルティニク、ロベール地域中心市場の変容研究において、プランテーションでの主要作物が砂糖キビからバナナへと転換した1960年代後半が地域市場の規模や地域社会に果たす役割の転換点であったと指摘している(De L'orme 1972:328-329)。この時期には小自営農民による食料作物栽培量が増加したが、それはバナナが食料作物との兼作可能な作物だからである。しかし、地域中心に個人経営商店やスーパーマーケットが進出して買手の選択肢が増え、また、道路網が整備されたことによって農民は首都の市場への直接出荷が可能になり地域中心市場の規模は縮小し、地域社会に果たす役割も変化したのである。

4. 市場における女性の労働

市場活動の担い手は主として女性である。市場に商品を出し、売り、買い入れるという過程は女性によって成就される。市場は、女性が卓越して占拠する空間であって、運送や運搬部門あるいは市場内の大家畜、食肉、手工芸品などの区画には男性がいるが、売手は圧倒的に女性であり、また買手も女性である⁵。

売手としての女性は、生産と販売を兼業する農民女性、商業専業者として委託または買い取り販売を行う市場再販人、街路販売人、行商人に分類される⁶。

兼業農民女性は、市場内に固有の販売台を持たず、市場の空場所の床にシートを敷くか、運搬籠に入れたまま商品を展示する。市場事務所で登録料(市税)を支払わない場合は市場の建物周辺の街路で販売する。地方自治体行政当局は、このような街路市を不法として取り締まりの対象にしているが、常設市場の空間的問題で登録数が制限されていることもあり一掃とはいかず、いわば黙認のかたちをとっている。彼女たちには専業の再販人のように固定された場所で顧客を待つことはできないので、価格の安さを強調して積極的に客をひきつける。また、昼前には値引き販売に入るのは、販売台の下を商品収納場所として利用できず、市場に長時間とどまる時間的余裕もないからである。兼業農民女性の市場参加行為は、出荷費用(集荷費、運送交通費、市場税、搬入費)の自己負担額および早朝6~7時から午後3~4時までの時間負担と商品販売利益とのバランスで決定される。したがって、それは商品となる作物が良い価格で売れるという確実な情報による予測が立つ場合、あるいはとくに町に出かける必要があつて売場も兼ねるという場合に限定される傾向が強い(Horowitz 1967:34)。市場販売以外に、兼業農民女性は自宅で直売あるいは行商、集荷のために巡回してくる再販人との交渉、会計処理など収穫物の商品化の一切を担っている。直売は、自宅近くの幹線自動車道路にでて「トレイ」方式で売る、カフェ、レストラン、非農家との契約販売、縁故のある都市住民との契約での置き置きなどである。また都市住民と運び入れ契約である場合はその途中で行商を兼ねる。小自営農民世帯では、男性とともに耕作労働に携わるかたわら生産物の換金化を取り仕切って生計を維持していく。女性世帯主世帯の場合には、耕作労働力も換金化の時間も不足しがちとなる。大半の農家が耕地規模が3ヘクタール以下で、つねにプランテーション経済の動向に左右されるカリブ海地域の小自営農民経済は不安定で、農業では生計維持が不可能となって専業の再販人となる女性も多い。ミンツはハイチの市場研究において、農民女性が専業再販人になることは家計破綻の露呈現象だと指摘している(Mintz 1960:63)。

農民女性が再販人になるまでの経緯は、まず、すでに再販人として市場に出ている家族・親族あるいは地縁の知人の補助者として販売活動を見習い、ついで少量の商品を借り入れて販売しながら独立に至るといふものとなる。当初の回転資本は、「片手で持てるほどの商品ストック」(Mintz 1960:65)である。この段階では市場に独立した販売台を保有せず、商品も生産者からの直接買取りや委託で仕入れたものではない。早朝に市場に搬入された商品を再販人から買取り、竹籠の頭上運搬で行商するか、街路に空き場所をみつめて販売する。ハイチ、マルティニクでは、「マルシャンド(marchande)、マッシュャン(machan)、ティ・パニエ(ti-panie)」と呼ばれているこのような駆け出し再販人には若年女性が多い。やがて資本が蓄積されると、ようやく市場再販人の地位に到達する。この地位は母から娘へと継承される。市場再販人は生産地を巡回して生産者との集荷

交渉し、運送交通費以外のすべての費用を自己負担し、全販売利益の10パーセントを委託販売料として受け取る。ハイチの場合、生産地から首都の再販人にいたる途中に「スクレート (sekeret)」、「マダン・サラ (madan-sara)」と呼ばれる地域中心段階での委託再販人が存在する。首都の消費者価格は、生産地原価の1.3倍～2倍であり、各段階で再販人は、10～20パーセントの委託販売料を取っている (Neptune-Anglade 1978:105)。集荷のための交渉段階では市場価格は確定していないので再販人は生産者からわずかに利ざやを稼ぐ場合もあるが、再販人と生産者は緊密な血縁、地縁でつながっているため過剰なごまかしは人間関係を損ない仕入れ源を失う危険が大きくなるので交渉は慎重に行われる (Horowitz, 1967:34、石塚 1997:265)。巡回市に出る再販人は、「カミオヌール (camionneur)」と呼ばれる男性の運送業者に商品運送を依存せざるを得ない。道路網が整備されていないハイチでは、燃費、通行諸経費、時間がかかる。運送業はリスクの大きい業種であるが、小規模販売の再販人との取引は零細規模で積荷の集中量が低いので収益はよくない。しかし、運送業者にとってはささやかな荷主であっても定期的な契約がとれる再販人は安定した顧客なので両者の関係は相互依存的なものとなっている。いわば彼らは都市側利益・経済の中央集権化に対抗する農村側利益同盟者であり、この同盟は運送業者が全島規模の運送業として自立して、都市側利益の側に移行するまで継続するのである (Mintz 1960:67)。マルティニクでは、各地区-地域中心-首都間の商品運送を行うのは、「タクシスト (taxist)」と呼ばれる小型バス、ワゴンを所有して定時旅客運送を行っている男性の運送業者である。彼らは各地区を回って、客と貨物をひろって地域中心、首都との間を往復運行する。市場では再販人の荷おろしを手伝い、また地元のよろず屋や酒場からの注文品を買い付けることもする。「タクシスト」は再販人に比較してはるかに高額な資本投下を行っているとはいえ、彼らの日常の荷主は再販人、地元の零細商人女性たちであって、彼らもまた零細地域経済の一要素なのである。ホロヴィッツの調査時の1950年代後半には、彼らは貨物運送を主体としていたが (Horowitz 1967:38)、今日では彼らの顧客の主体は通勤客か買物客である。この変化は大規模運送業へと自立的発展を遂げたのではなく、再販人や零細商人レベルにも自家用自動車保有が進んで委託運送が減少したこと、海外県化による経済、社会構造改変によって内陸地区に地域中心、首都へ通勤する者が居住するようになったことによる変化である。

市場に運ばれた商品が登録集荷場で運送業者によって荷おろしされると、「ドッカー (dockeur)」と呼ばれる運搬人男性が、荷籠の名札を確認してそれぞれ当該再販人の売場まで運ぶ。この際彼らは出口で守衛から荷の点検を受けて、市場税を立替で支払う。売場で待つ再販人は、一つの荷を受け取るごとに運搬人に賃金と立替額の合計を支払う。運搬人が往復回数を稼ごうとして急ぐために入荷時の市場の入口付近は大混雑する。

市場再販人の最初の買手は、仕入れとして買い付けをする「マルシャンド」、「マッシュャン」、「ティ・パニエ」たちである。彼女たちへの販売価格は3～5パーセント引きなので、それが彼女たちの行商や街路での商売の利ざやとなる。市場販売人たちは初客からは直接手渡しで金を受け渡しをしないなどの初客についてのジंकスを強固に守っている (De L'orme 1972:331)。商品価格は、同一区画内の平均を大きく外れることはないが、買手が一見客が顧客か、時間、商品量の多少などで変化する。入荷が不定期の旬ものの野菜・果物については変動的となる。売手は買手とのやり取りのなかで、値引き、掛売り、取り置き、商品を触って選別する権利、計量時の

割増、別の商品を「おまけ」として添えるなどのサービスの度合いを瞬時に決定する。ミンツが、「売手と買手の間に成立する内密形態の關係」と定義するこの行為は「プラティーク (pratique)」と呼ばれている (Mintz 1960:65)。ド・ロームは、地域中心市場の役割が変化しているにもかかわらず、「プラティーク」に見られる経済交換行為の最大の個人化という本質は変化していないと指摘している (De L'Orme 1972:330)。売手は顧客ひとりひとりのふだんの商品の需要度や利用法の知識などをよく把握しており、それに応じてサービス内容は変化する。また、会話のなかで買手の側からもたらされるさまざまな情報は、売手である再販人を通して仕入れの過程で生産者である農民女性に伝達される。ハイチの再販人の名称である「マダン・サラ」の語源は、群れをなしてさえずるカササギという語であるが、これは彼女たちの情報伝達機能をよく示すものである。

5. 市場活動における女性の労働の意義

各地域の農民市場を通じて循環する物資と金は、地域行政機関によって徴収される市場税、生産者、販売者、運送業者などからの納税額に反映されるのだが、それは微細な交換行為の巨大な合計であるといえる。行政当局と都市の大規模商人たち、すなわち都市権力の側は、この複雑な仲介項からなるシステムを「合理化、集中化」する必要性をつねに主張する。また都市権力は小自営農民の経済行動の操作、統制するための立法化によって農村側利益を代表する再販人の活動を制限しようとする。ハイチでは、「スペキュラトゥール (spéculeur)」と呼ばれる輸出認可ライセンスを持つ商人と、これを持たない「スー・マラン (sous-marin)」と呼ばれる下部段階の商人の利益が介在しているので、輸出向け作物の集荷過程の利害衝突はさらに複雑なものとなる (Mintz 1960:67)。

再販人は仕入れ地域の生産者との間に深い人間関係の根を張っている。この人間関係は血縁、地縁をもとに日常的なモノ、情報の交換行為をとおして築かれた互酬性と信頼の網の目である。生産者である農民は、再販人を通じて量の多少を問わず定期的に市場出荷し、現金収入を得ることができる。また、信頼に基づく委託方式は再販人にとって商品ストック問題や仕入れ資金問題のうえで有利である。市場での再販人からの購入は買手にとって、小規模買手が可能であること、売手間の競争によって価格が安くなること、つねに新鮮な商品を手に入れるという利点がある。再販人の経済活動は、あくまでも地域に根ざした緊密な人間関係という基盤に成立するのである。したがって、再販人として成功をおさめても、そこから都市に個人店舗を開設するという商業段階への発展は難しい。再販人は、つねに仕入れ地域を巡回して人間関係を保守していなければならないし、それは他人任せには出来ない。つまり店舗を構えてしまうと仕入れ活動が時間的に無理になってしまい、農民との人間関係が希薄になれば商売自体がなりたなくなるのである。市場の売場の同一区画内では、再販人の商売の規模に差異が存在し、区画を取り仕切る勢力を持つ再販人は存在するが、その力は仕入れ地域にまで及ぶことはない。

出自という資源を運用して極小の物質的投資で市場活動に参入が可能なこの再販人システムの存在は、女性たちの経済活動参加の選択肢を増やしている (石塚 1982:10、1997:264、2003:113)。圧倒的なプランテーション経済の支配のもとで限定された土地で自家用食糧をきりつめながら、現金収入のために商品生産を行っているカリブ海地域の弱体な小自営農民経済では、主要な家計維持者として男性だけをあてにすることは難しいし、つねに家計自体が破綻の危

険にさらされている。女性世帯主世帯家計の脆弱性はいうまでもない。したがって、農業経営が破綻した後に、農民女性が再販人という生計手段を選択できることは女性の生存のためのセーフティ・ネットがあるということである。例えば、400人を越えるドミニカの女性行商人の活動は、近隣島嶼のみならず南はヴェネズエラから、北はセント・トーマスまで広域に展開され、野菜、柑橘類、ヤマイモやタロイモなどの根菜類など多種多様な食料作物が彼女たちの手を通してカリブ海地域に流通している。しかし、これほど大規模な商売も、それに必要な知識や技術は「母を手伝う」というきわめて伝統的な方法で伝承されている(石塚1997:264)。集落での集荷、梱包、積出港までの運送、船積は、低年齢の子どもたちまで総動員して行われる。また行商や市場販売人という職種は、失業者の吸収という機能をも持っている。1987年の大規模なハリケーン・デヴィッドの影響でドミニカ経済は破壊的な被害を蒙り、観光部門から大量の解雇者が出たが、若年女性は行商人として「家業」に吸収された。その結果女性行商人活動は活性化したのである。行商に出た女性たちは広く島外からも商品とともに情報を地域に持ち帰ってくる。彼女たちのもたらす情報は地域内の小自営農民の生産品目の決定など農業に関連した行動のみならず出稼ぎや移民についての行動決定に重要な役割を果たしている(Clarendon1986:56-57)。

市場での販売に携わる女性たちの役割もまた余剰生産物の換金収入獲得だけにとどまる物ではない。居住地域内の市場向け食料作物を集荷して販売するという委託販売人活動のためには、仕入れ源である地域内に親族の範囲を越えた広くかつ深い人間関係の根を張っておかねばならない。そして、市場では買い手として現れる都市居住の内陸地域出身者に、内陸地域の情報を伝え、また逆に彼らからの親族への伝言などを地域に持ち帰ることが要求される。彼女たちの商売の基盤には、このような緊密な人間関係が存在しているのである。行商人、市場販売人としての高年齢女性たちの経済活動は、小自営農民による食料作物栽培農業をナショナルなレベルおよびグローバルなレベルの経済交換市場へと接合するとともに内陸農村地域と都市との社会的統合に大きく貢献しているのである(石塚1997:265)。

6. 内部市場分析におけるジェンダー視点の重要性

マルクス主義フェミニストのヴェールホフは、食糧生産者である「近代において再編された農民」と生命生産者である「主婦」は、「自然の一定部分をまるで「正常」な生産手段のごとく占有する生産者として社会的に発明され、作り出された」と指摘し、そのように見なされるがゆえに近代における「農民」、「主婦」の労働は二重に収奪される存在になると述べている(ヴェールホフ1995=1988/1991:53-61)。カリブ海地域の農民女性は、この収奪における極限的存在である。そして再販人とはこのような状況の中で生産手段である土地から身体的に自由になることにきわどい自己の生存の可能性を賭けた女性たちであるといえる。このセーフティ・ネット機能は、再販人が都市権力に対抗する農村側の小自営農民の同盟者であり、都市と農村の媒介者であることから生じている。個人店舗所有者の経済活動とは異なり、彼女たちの経済活動は農村―都市を日常的に自己の身体で緊密に結びつけることで成り立っている。また、離農女性だけではなく、ドミニカの事例で明らかのように都市や観光産業における雇用労働からの解雇者はこの経済活動に吸収されている。つまり、これは農村と都市の女性余剰労働力の調節弁でもある。農村では生産者に対するの買手、都市の市場では売手というこのような再販人

女性の労働によって、農村における小自営農民生産は、ナショナルそしてグローバルな経済交換網へと接合されていくのである。

また、ヴェールホフは、「農民と黒人は、都市住民と白人に対して女性的な地位にあるように現れ、またそれらの間の分業は、国際分業あるいは国内分業のように現れるだけでなく、また性別分業に類似したもののように現れる」と述べている(ヴェールホフ1995=1988/1991:63)。カリブ海地域では、小自営農民経済・農村は黒人・女性、プランテーション経済・都市は白人・男性という人種およびジェンダー・カテゴリーで現れる。そして小自営農民は男女両性共に「女性」というカテゴリーで世界経済に「接合」といえる。

以上から、ミンツの「内部市場売買システム」概念分析では、農民市場での売買行為が接合を実現することまでは検証できるが、この市場売買行為主体がなぜ圧倒的に女性であるのかということが明確に説明されるためにはジェンダー視点からの分析が加えられることが不可欠であることが分かる。

ヴェールホフとともに「継続的本源的蓄積」論の提示にあたってM.ミースは、「わたしたちが「第三世界」の国々と農民の状態の分析に取りかかったとたん、第三世界の貧困とその増大に対する従来の説明が不十分であることが明白になった」(ミース1988・1991=1995:15)と指摘した⁷。開発途上地域の小規模農業を単に「資源―貧窮」型であると分類するだけではなく、「資源―貧窮」が、近代世界システムの「周辺」と農村と農民世帯が接合によって中核のための「女性=収奪可能なジェンダーの場」となることによって起こるといふ説明がなされなければならないのである。

注

1. M.フーコーは、近代の理性的「人間」主体を覆す知として精神分析学と文化人類学をあげている(Foucault1966=1974:395)。
2. 1965年にL.アルチュセールは、『マルクスのために』、『資本論を読む』においてソ連型教条主義的マルクス主義の経済決定、単線進化論を覆し、生産様式を社会・歴史分析の基礎単位として蘇らせた。彼の理論的影響のもとでマルクス主義人類学は、個別地域をそこでの支配的生産様式とそれに下屬し、接合する生産様式との複合の構造である社会構成体として把握する視点を確立した(山崎1980:26)。これ以降、「第三世界」地域の社会・経済分析のための「接合理論」や「周辺資本主義論」の議論が活発化していった。
3. 販売形式だけではなく、木製または籐編みの枠つきトレイの中に商品を入れて頭上運搬して行商したり、折りたたみ式の脚台にのせて街路で販売する販売人女性の名称としても使われている。この名称は、カリブ海地域全域的に見られる(Shepherd1999:104)。
4. 経済のグローバル化のもとで、欧米地域から、またカリブ海島嶼間の交通、輸送手段が多様化し、島外者の市場への参入も激しくなっている。
5. 1970～1980年代のハイチの例では、国内商業・販売就業人口の78パーセント、農村部商業・販売人口の93パーセントが女性であった。農村部では農産物だけではなく衣類、日用雑貨などの生活物資のほとんどが女性商人によって供給されていた(Neptune-Anglade1986:156-165)。
6. 島嶼によって商品流通経路が異なるので分類や名称も多様である。ハイチ、マルティニク、グアドループでは専門の再販人は「ルヴァンドゥーズ(revenneuse)」と呼ばれる。また英語圏島嶼では、higgler, huckster, hawker, tray-girl, vendorなどの分類名称が使われる。
7. ドイツのマルクス主義フェミニスト地域研究者であるM.ミース、C.ヴェールホフ、V.ベンホルト＝トムゼンらのマルクスからローザ・ルクセンブルグを継承した「継続的本源的蓄積」の議論、すなわち資本―賃労働以外の生産関係において今日も本源的蓄積過程が継続しているという議論はいわばジェンダー視点をもって地域研究の現場から近代世界システム論を補完しつつ、それを乗り越えるものであるといえる。「左翼は歴史的に一貫して女性・農民嫌いであった」(Werlthof1991=2004:5)というヴェールホフの指摘どおり近代経済学のみならずマルクス主義もまたジェンダー視点を欠いてきたのである。

参考文献

- Althusser, Louis, (1965) *Lire le Capital*, Paris, François Maspero (= 1996、今村仁司訳『資本論を読む』、筑摩書房)
- Althusser, Louis at al. (1965) *Pour Marx*, Paris, La Decouverte/Maspero (=1994、河野健二他訳『マルクスのために』平凡社)
- Carnegie Charles (1987) "Introduction", Charles, Carnegie (ed.) *Afro-Caribbean Villages in Historical Perspective: -ACIJ Research Review* No.2, Kingston African-Caribbean Institute of Jamaica, pp. iv-x.
- Clarendon, Hannah (1986) "The Hucsters of Dominica", Ellis Pat (ed.), *Women of The Caribbean*, London/New Jersey: Zed Books, pp. 56-61.
- De l'orme, Jean Claude (1972) "Les transformations économiques et sociales d'un marché Martiniquais", in Jean Benoist, *L'archipel inachevé: Culture et société aux Antilles françaises*, Montréal, Les Presse Universitaire de Montréal, pp. 321-334.
- Elis, Patricia (2003) *Women Gender & Development in the Caribbean: Reflections & Projections*, London & N.Y., Zed Books
- Foucault, Michel (1966) *Les Mots et les Chose : Une Archeologie des Sciences Humaines*, Paris, Editions Gallimard (=1974、渡辺一民、佐々木明訳『言葉と物—人文科学の考古学』新潮社)
- Horowitz, Michael (1967) *Morne-Paysan: Peasant Village in Martinique*, New York Holt Rinehart & Winston.
- 石塚道子 (1982) 「市場と女性労働の役割—カリブ海地域アンティール諸島の場合一」、大阪私立短期大学協会研究報告集, 19, pp. 7-11.
- (1985) 「カリブ海地域における社会空間I—小アンティール諸島民の空間分類」山口昌男編『環カリブ海地域における複合文化の比較研究—アフリカ・アジア系社会の社会・文化空間の変動過程』(文部省科研中間報告書)東京外国語大学, pp.83-109.
- (1991) 「カリブ海地域におけるフェミニズムの視点」、大阪薫英女子短期大学研究報告26, pp. 187-198.
- (1993) 「自律から自立へ—カリブ海地域女性の周辺性—」大阪薫英女子短期大学研究紀要, 28, pp. 13-22.
- (1997) 「カリブ海地域小自営農民女性の地域維持力」浮田典良編『地域文化を生きる』大明堂, pp. 253-278.
- (2002) 「先駆ける周辺—カリブ海地域におけるグローバル化とジェンダー規範変容研究の視点—」『グローバル化とジェンダー規範』に関する研究報告書お茶の水女子大学, pp. 23-33.
- (2003) 「カリブ海地域女性たちの「語り」」杉浦勉、鈴木真一郎、東琢磨編『シンポジウム ラティーンノ／カリビアン文化実践』エディマン, pp. 105-115.
- Mies Maria, Veronika, Benholt-Thomsen and Claudia Werlhof (1988/1991) *Women the last Colony*, London, Zed Books (=1995、古田睦美・善本裕子訳『世界システムと女性』藤原書店).
- Mintz, Sidney (1955) "The Jamican Internal Marketing Pattern", *Social and Economic Studies* 4 (1), pp. 95-103.
- (1959) "Internal Marketing System as mechanism of social articulation", in Ray, V.F. (ed.) *Intermediate Societies, Social Mobility and communications*, Seattle, A.S.E.
- (1960) "Marché et vie rural en Haiti, Jean Benist (ed.) *Les sociétés Antilles*, St.Marie, Centre de recherches Caraïbe, pp. 59-70.
- (1964) "The employment of capital by market women in Haiti", in Raymond Firth & Yamey, B (eds.) *Capital, Saving and Credit in Pesant Societies*, Chicago, Aldine Publishing, pp. 256-286.
- (1967) "Petits cultivateurs et proletaires dans la région Caraïbes", in CNRS, *Les problèmes agraires des Amériques Latines*, Paris, CNRS, pp. 93-100.
- (1973) "A note on the definition of Pesantry", *Journal of Pesant Studies* 1 (1), pp. 91-106.
- (1974) *Caribbean transformations*, Baltimore & London The John Hopkins University Press.
- Mints, Sidney & Sally, Price (eds), 1985, *Caribbean Contours*, Baltimore & London, The John Hopkins University Press.
- Momsen, Janet (1987) "The feminization of Agriculture in the Caribbean" in Momsen, Janet & Janet, Towensend, *Gerography of Gender in the Third World*, London. Hutchison, pp. 344-347.
- (1993a) "Women, Work and the Life Course in the Rural Caribbean" in Katz, Cindi & Monk, Janet (eds.) *Full Curcle : Geography of Women over the life Course*, London & New York, Routledge, pp. 122-137.
- (1993b) "Development & Gender divisions of labour in the rural Eastern Caribbean" Momsen, Janet (ed.) *Women and Change in the Caribbean: A pan-Caribbean Perspective*, London/Kingston/Bloomington, James Currey/Ian Randel/Indiana University Press, pp. 232-246.
- Neptune-Anglade, Mireille (1986) *L'autre moitié du développement : à props du travail des femmes en Haïti*, Montréal, Editions des Alizes.
- Potter, Robert, Barker, David, Conway, Dennis, Klak, Thomas (2004) *The Contemporary Caribbean*, Harlow, Persons Education Limited.
- Shepherd, Verene (ed.) (1999) *Women in Caribbean History : The British-Colonised Territories*, Kingston/Oxford/Princeton, Ian Randle/James Currey/Markus Wiener.
- Wallerstein, Immanuel (2004) *World Analysis: An Introduction*, Duke University Press (=2006 山下範久訳『入門世界システム論』藤原書店)
- Werlhof von Claudia (1991) *Wsa Haben die Huhner mit dem Dollar zu tun?: Frauen Und Oekonomie*, Munchen, Verlag Frauenoffensive (=2004 伊藤明子訳『女性と経済 主婦化・農民化する世界』日本経済評論社)
- WCED (World Commision on Enviroment and Development) (1987) *Our Common Future*, Oxford University Press, Oxford.
- 山崎カヲル編訳(1980)『マルクス主義と経済人類学』柘植書房